

時代小説と江戸・深川④

時代小説の歴史

江東区深川江戸資料館

現在でも多くの人に読まれている「時代小説」。今号ではその歴史をたどります。

1. 時代小説の歴史 明治から戦前

(1) その前史

時代小説の源流は、江戸時代の歌舞伎や明治時代に出版された講談の速記本にあるといわれています。

明治17年(1884)に出版された、三遊亭円朝の『怪談牡丹燈籠』などによって、講談速記本の流行が始まり、やがて明治44年(1911)に創刊された書き講談本「立川文庫」がこどもたちを中心にブームとなります。その作品には『真田幸村』『猿飛佐助』など、後の時代小説につながる作品が多数あります。また、同じ年に創刊された講談社の「講談倶楽部」も大正2年(1913)頃から書き講談を掲載し始めました。その後同社が発刊する「キング」「少年倶楽部」は、時代小説家の発表の場となり添えられる挿絵とともに人気を呼びました。

(2) 時代小説の始まり

「都新聞」に大正2年(1913)から連載された中里介山の『大菩薩峠』が時代小説・大衆小説の嚆矢といわれています。「音無しの構え」の机龍之助が主人公の28年にわたり書かれたこの大河小説は後の作品に大きな影響を与えた剣豪小説で、大仏次郎の『鞍馬天狗』大正13年(1924)、林不忘『新版大岡政談』昭和2年(1927)の丹下左膳などの時代小説のヒーローへつながっていきます。

岡本綺堂の『半七捕物帳』は大正6年(1917)から「文芸倶楽部」に連載されました。明治5年(1872)生まれの綺堂は、江戸の名残を身を持って知っており江戸の風景・景色が詳細に書かれています。犯人探し・謎解きとしてのミステリーの手法と時代小説を融合させた捕物帳というジャンルは、後に続く、佐々木味津三の『右門捕物帖』昭和3年(1928)、野村胡堂の『銭形平次捕物控』昭和6年(1931)が三大捕物帳といわれ、さらに横溝正史『人形佐七捕物帳』昭和13年(1938)、城昌幸『若さま侍捕物手帖』昭和14年(1939)を加え五大捕物帳ともいわれています。



中里介山『大菩薩峠』大正2年(1913)
口絵・机龍之助
玉流堂版・大正7年(1918)
羽村市郷土博物館蔵

(3) 様々なジャンルの作品

歴史上の著名な出来事・人物を書く歴史小説としては、白井喬二『新撰組』大正13年(1924)、大仏次郎『赤穂浪士』昭和2年(1927)、直木三十五『南国太平記』昭和5年(1930)などの作品があります。

長谷川伸『沓掛時次郎』昭和3年(1928)や子母澤寛『弥太郎笠』昭和6年(1931)によって、旅から旅を股にかける「股旅物」というジャンルも昭和初期に登場します。

そして、戦争へと向かう時代を反映し、剣の修行を通して人間として成長をしていく求道的な主人公を書く吉川英治『宮本武蔵』昭和10年(1935)が人気を集めます。

2. 時代小説の歴史 戦後から現在

(1) 戦後のスタート

戦後の自由な雰囲気を実現したのが、村上元三の『佐々木小次郎』昭和24年(1949)であり、吉川英治の求道的な武蔵と小次郎の関係を考えると象徴的

な印象を持ちます。続いて山手樹一郎の作品や五味康祐『柳生武芸帳』昭和31年(1956)、川口松太郎『新吾十番勝負』昭和32年(1957)などの剣豪物が人気となります、なかでも柴田錬三郎の『眠狂四郎無頼控』昭和31年(1956)は、時代を反映したニヒルな混血の主人公が登場する物語です。

のちに、『竜馬がゆく』で歴史小説家として名声を得る司馬遼太郎は『^{ふくろう}梟の城』昭和33年(1958)で直木賞を受賞し小説家としてのキャリアをスタートさせます。この小説は忍者物で、山田風太郎の『甲賀忍法帖』昭和33年(1958)、村山知義の『忍びの者』昭和35年(1960)などと共に忍者ブームを起こします。

一方、戦前から活躍をしていた山本周五郎は、武家もの、下町もの、岡場所ものなど多彩なジャンルで作品を発表します。映画化された作品も多く、黒澤明監督が映画化した「赤ひげ(原作『赤ひげ診療譚』昭和33年(1958))」などがあります。当時、盛んだった映画と時代小説が結びついて時代劇が多く作られました。

(2) ブームの中で

大衆小説である時代小説は、その時代の雰囲気や作品へ反映します。戦後の復興から高度経済成長に向かう時代に読まれた、山岡荘八の歴史小説『徳川家康』昭和25年(1950)。70年代安保の時代の雰囲気を感じさせる笹沢左保の股旅物『木枯らし紋次郎』昭和46年(1971)などの作品です。

その状況のなか、時代小説のビッグ3といわれた、司馬遼太郎、池波正太郎、藤沢周平が登場します。歴史小説家として名を馳せた司馬遼太郎の『竜馬がゆく』昭和36年(1961)、実在の人物を題材に新しい形の捕物帳を展開した池波正太郎の『鬼平犯科帳』昭和43年(1968)、武家物、市井物を得意とした藤沢周平の『用心棒日月抄』昭和51年(1976)など、現在まで長く人々に読まれている作家・作品です。また、多くの作品がテレビ化され、原作の人気をさらに高めました。

(3) 女流作家の活躍

長い間、時代小説の書き手は男性が中心でした。このような状況のなかから、永井路子、杉本苑子などが女流作家としての先鞭をつけました。

その後続く、『御宿かわせみ』昭和48年(1973)の平岩弓枝、『深川濡通り木戸番小屋』昭和59年(1984)の北原亜以子、『髪結い伊三次捕物余話』平成9年(1997)の宇江佐真理、そして、『本所深川ふしぎ草紙』平成3年(1991)の宮部みゆきなど、実に多くの女流作家が活躍し、現在まで続いて



佐伯泰英『陽炎ノ辻 居眠り磐音江戸双紙』平成14年(2002) 双葉文庫

います。

(4) そして現在

平成の時代に入り、先述のビッグ3が相次いで亡くなります。そうした危機的な状況の中で現れたのが佐伯泰英『居眠り磐音江戸双紙』平成14年(2002)です。従来の時代小説は雑誌に連載した物が単行本となり、その後、文庫本となるというスタイルが主流でした。そのなかで佐伯は、書き下し時代文庫という新しいスタイルで人気となりました。

現在では、このスタイルの作品がとても増え、佐伯に続く作家として、上田秀人、鈴木英治、風野真知雄などが活躍しています。

一方、時代小説の伝統を引継ぐ、市井物が今でも人気を呼んでいます。山本一力『あかね空』平成13年(2001)、西條奈加『善人長屋』平成22年(2010)などで、この2人の作家は深川に住んでいます。

時代小説は過去の名作の人気、女流作家の活躍、書き下ろし時代小説の隆盛、市井物の人気などを背景に今後も、人気は続きそうです。

(主な参考文献)

尾崎秀樹監修『歴史・時代小説事典』

(実業之日本社/2000)

縄田一男『時代小説の読みどころ』

(角川文庫/2002)

末國善己『時代小説マストリード100』

(日経文芸文庫/2015)